

九大教育人類学の20年(1998-2018)

坂元, 一光
人間環境学研究院教育学部門国際教育環境学講座 : 教授 (教育人類学)

<https://doi.org/10.15017/7387325>

出版情報 : 国際教育文化研究. 19, pp.45-59, 2019-09-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



九大教育人類学の 20 年（1998 - 2018）

坂元 一光

はじめに

筆者が九大の教育人類学研究室の運営を引き継いで 2018 年 3 月で 20 年目をむかえた。この節目をとらえ、かつてそこで研鑽を積み研究者（大学教員）となった OB/OG の研究活動を集約することで当該応用人類学の知の水脈の現況を示してみたい。かつて拙著『アジアの子どもと教育文化』（九大出版会 2006）で九州大学教育学部に設置されていた「比較教育文化研究施設（1955～1998）」（以下「比研」）の研究活動をまとめ、これを教育人類学の「ローカル」で「組織的」な展開と位置付けた。「比研」の発展的解消後の教育人類学は、1998 年に新設された大学院人間環境学研究科（2000 年、人間環境学研究院・学府に再編）の教育人類学研究室へと引き継がれた。筆者の着任以降（1998～）、研究室からは多数の優秀な研究者が巣立ち、かつての「比研」の教育人類学は（筆者も含め）彼/彼女たちによって「個別的に」引き継がれていった。今回われわれの研究活動を集約することによって、九大教育人類学のひとつの継承のかたちを概観し、当該領域のさらなる発展のための参考に供したい。

以下の内容は筆者が当該研究室出身の研究者から情報の提供を受け、それにもとづき各人の研究活動概要を編集したものである。彼/彼女らは教育人類学という研究領域を共有しつつもそれぞれが独自の問題意識をもって幅広い研究活動を進めている。人によっては教育人類学の枠を飛び越えて新しい領域に挑戦している者もある。明確なディシプリンを持たない領域に苛立ちを覚えた者もあったかもしれない。しかし研究室での議論や対話を想起するとき、彼/彼女たちの数々の成果のなかにはこの研究室で練り上げられ緩やかに共有された独自の観点が息づいていると確信している。OB/OG 教員全員のこれまでの研究活動をもって九大教育人類学の知の水脈とみなす理由もそこにある。

研究室出身者の研究活動

以下、教育人類学研究室という知のコミュニティで研鑽を積み巣立っていった研究者の研究活動の概要をその主要テーマとともに順次紹介していく。

1) 産育および教育（文化伝達）の比較民族誌的研究（坂元一光）

筆者はこれまで東・東南アジア諸社会を中心に主に人（いのち）と文化の再生産（継承）を循環的、接合的に捉える視座にもとづき、子どもを産み育て社会、文化を次世代に継承する人びとの実践や仕組みを明らかにする研究に取り組んできた。その際の基本的な方法として、①特定の地域社会の精緻な観察と文脈的理解を前提とする民族誌アプローチとともに、②複数の社会を俯瞰的、構造的に相互参照し検討する比較文化的アプローチを併用してきた。結果、対象社会とテーマは複数かつ広範にわたることとなったが、大きくは①～④のサブテーマにまとめることができる。

① アジア諸社会の産育文化と人口動態に関する研究

当該研究は、主として養育者から子どもに向けられた眼差しや働きかけの様式をアジアの多様な社会的、文化的文脈に即して比較文化的に明らかにする取り組みである。例えばこれまで人口動態指標として扱われてきた子どもの性別選好や少子化の現象を、現地社会の子ども観や子どもの処遇に関する社会的、文化的過程の帰結と捉え、社会編成原理や宗教伝統等を異にする複数社会（日本村落社会、韓国社会、インドネシア西スマトラ州、北部タイ社会等）の産育実践や儀礼実践、あるいは子どもの役割期待、民俗表象の比較検討作業を通して、性別選好や少子化現象と社会構造・宗教伝統との輻輳的關係性および都市化やグローバル化によるそれらの全体的変容など明らかにしてきた。

<関連文献（抜粋：以下同じ）>

坂元一光 1985「韓国の子どもと祖先」『子ども文化の原像—文化人類学的視点から—』岩田慶治（編）、日本放送出版協会 pp. 439-458

坂元一光 1992「韓国産育民俗の一側面—男児選好の背景と変容を中心に—」『比較民俗研究』第5号、pp. 148-156

坂元一光 1998「インドネシア・西スマトラ村落における通過儀礼の一側面」『九州大学大学院教育学研究紀要』創刊号、pp. 209-227

坂元一光 2006『アジア子どもと教育文化：人類学的視角と方法』九州大学出版会。

坂元一光 2008「多産多福と多男富貴の現在：東アジアにおける産育文化の再編」『アジアから観る、考える：文化人類学入門』片山隆裕（編）、ナカニシヤ出版、pp. 49-61

② 民族教育とエスニシティの相關研究

当該研究では、多民族社会・国家における民族社会、少数民族社会における文化の次世代継承や集団的アイデンティティの変容を、民族教育や宗教教育、伝統（通過）儀礼の実践等に着目し、主に「文化過程としての教育」や「民族境界のダイナミズム」等の視点から調査研究をおこなった。東・東南アジアの多民族社会（タイ、インドネシア）やとりわけエスニシティが顕在化しやすい少数民族社会（中国新疆ウイグル社会）を中心に、調査地ごとの国家及び民族間の関係の動態を示す一方で、公的な宗教教育や民族教育のみならず儀礼生活や家庭教育など多様な教育・学習の影響力を描出しつつ、教育とエスニシティの間の緊密かつ相互的な関係性を指摘している。

<関連文献>

坂元一光 1997「北タイの農村家庭における写真展示とその視覚的「語り」」『比較家族史研究』第11号、pp. 97-

- 坂元一光 2003「タイ教育開発と寺院学校」『九州大学大学院教育学研究紀要』第5号、pp. 141-160,
- 坂元一光, シリナイ・マソティ 2007「中国少数民族の言語と集団間関係の新局面ー新疆ウルムチの「民考漢」を中心にー」『九州大学大学院教育学研究紀要』第9号、pp. 71-90,
- 坂元一光, アナトラ・グリジャナティ 2008「中国少数民族の子どもと漢語受容：新疆都市部における言語接触と人間形成」『国際教育文化研究』8. pp. 19-34
- 坂元一光, アナトラ・グリジャナティ 2009「新疆ウイグル社会の女兒に対する産育及び教育ー中国少数民族の子どもとジェンダーー」『九州大学大学院教育学研究紀要』11号、pp. 151-165,

③ 子どもの生活世界とその文化的構成に関する研究

当該研究は、子どもの生活世界の構成をモノ環境や大人との関係性において明らかにしようとするものである。そこでは近年の人類学的技術論や身体論あるいはモノ研究の視点も積極的に援用しつつ、子どもを取り巻くモノ (material culture) や道具 (技術的制作物) あるいは大人たちとの相互交渉の過程において組織化される子どもの行動 (実践) や身体性あるいは子どもへの眼差し等を捉えようとする。これらのテーマ設定はとりわけ2009年新設の大学院 (統合新領域学府ユーザー感性学専攻：併任) におけるユーザー (利用者としての子ども、養育者) 目線に立った課題解決型研究に接続しており、子どもの生活世界をモノや技術も含めて統合的に論ずる新しい子ども文化論の構想につながっている。

<関連文献>

- 坂元一光 1996「北タイ農村の子供の生活とその変容」丸山孝一(編)『現代タイ農民生活誌』九州大学出版会、pp. 91-125
- 坂元一光 2004「子どもの娯楽メディアにおける文化政治：表象と実践をめぐる大人／子どもの関係性」『子ども社会研究』10. pp. 103-114
- 坂元一光, アナトラ・グリジャナティ 2008「ビュシュック (揺籃) 育児とその再編ー中国新疆ウイグルの産育文化の一側面ー」『九州大学大学院教育学研究紀要』10号、pp. 59-78
- 坂元一光 2010「日本の感性 (Kansei) 研究をめぐる粗描ーレビューとスケッチー」『九州大学大学院教育学研究紀要』第12号、pp. 31-47
- 坂元一光、宮本聡、金子真紀 2018「「具体の科学」としての教育プログラムー「〇育」を中心にー」『九州大学大学院教育学研究紀要』20号、23-39

④ 民俗・民族文化の創造的継承に関する研究

当該研究では、日本国内の民俗文化 (民俗手芸、民俗能) が観光化の文脈のなかで創造的に継承される過程に関して、文化の資源化、身体技法や技術的实践等の概念を用いた研究をおこなってきた。たとえば柳川の雛祭りに伴う吊るし飾り習俗では、外部の眼差しとの相互作用から女性たちの手芸コミュニティへの能動的参加が促され、伝統の手芸技術に多様な更新がもたらされる中で習俗全体の創造的継承が実現される過程を明らかにした。また民俗芸能の継承過程にも関心を広げ、山

形庄内の黒川能や周辺の民俗能を中心に都市化や少子高齢化など現代的文脈における民俗芸能の継承やその役割に関する研究にも取り組んでいる。とりわけ研究者自身が能の知識のみならず身体知(技)の体得を通じて理解の深化をめざした試みは民俗芸能研究の新たな方法的展望を開いた。

<関連文献>

- 坂元一光 1998「地方文化の生成とそのプロトコル(国際儀礼)交換—大分・西スマトラ州文化交流事業の事例から—」江淵一公(編)『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店、pp. 115-132
- 坂元一光 2017「参与の周縁—庄内黒川能調査をめぐる自己言及的覚書—」『九州大学大学院教育学研究紀要』第19号、1-18頁
- 坂元一光、翁文静、宮本聡、金子真紀、2015「体得のフィールドワーク—フィールド参入における技能習得と関係性の変容—」『国際教育文化研究』(国際教育文化研究会) 2015. 8、第15、pp. 1-21
- 坂元一光 2019「柳川さげもん民俗誌—手芸コミュニティと民俗技術の創造的継承—」『九州大学大学院教育学研究紀要』21号 1-23

(九州大学・人間環境学研究院・教授)

2) トランスナショナルな人の移動と教育(山ノ内裕子)

大学院修士課程以降、今日に至るまで、国境を越えて移動する人々とその子孫の教育と文化に関心を持ち、日本と世界最大の日系移民社会を有するブラジルにて、人の移動に即して教育人類学的研究を進めてきた。(1)ブラジルでは、学齢期の子どもたちのみならず、日本人移民とその子孫の教育と文化の問題について研究を行いつつ、日本では、(2)ブラジル人を中心として、外国にルーツのある子どもたちの教育について研究を行ってきた。また、日本社会では人口の2%が外国人であることから、教育分野にとどまらず、(3)多文化共生のまちづくりに関する研究についても、人類学の知見を用いて、研究を行ってきた。

① 日系ブラジル人・ブラジル日系社会の教育と文化に関する研究

日本からブラジルへの移住は、1908年の第一回笠戸丸移民以降、第二次世界大戦を挟んで1970年代まで国策として行われてきたが、1990年の改正出入国管理及び難民認定法施行によって、再び「国策」として、日本人の両親や祖父母を持つ人々たちを労働者として受け入れてきた。これまで、日系ブラジル人のトランスナショナルな移動に即して、日本とブラジルの双方において、エスニック・コミュニティなどをフィールドとしつつ、継続的に参与観察やインタビューを行ってきた。

<関連文献>

- 山ノ内裕子 1998「日系ブラジル人とは誰か—在日『日系ブラジル人』をめぐる『戦略』『戦術』」、江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』、明石書店、253-268頁
- 山ノ内裕子 2002「日系ブラジル人」のエスニシティ—ブラジル・日本におけるフィールドワークから、『国際教育文化研究』第2号、97-107頁
- 山ノ内裕子 2003「学校における文化と不平等—ブラジル人少女マルシアの事例から」、『九州大学大学院教育学研究紀要』、第4号、207-221頁

- 山ノ内裕子 2003「ブラジルの日系青年団体における新しいエスニシティ——サンパウロの事例から」、『国際教育文化研究』、第3号、103-114頁
- 山ノ内裕子、2004『『コロシア』と『デカセギ』—移動の経験におけるエスニシティの形成』、『九州人類学研究会報』第31号、101-107頁
- 山ノ内裕子 2006「日系人研究における『差異化』と『他者性』—ブラジル日系社会でのフィールドワークの経験から」、『異文化間教育』、第24号、27-40頁
- 山ノ内裕子 2007「在ブラジル原爆被爆者協会の活動のあゆみ—被爆者援護における『属地主義』の論理とのたたかい」、『関西大学人権問題研究室紀要』、第55号、19-34頁
- 山ノ内裕子 2010「逆境を生き抜く—日系ブラジル人の移動と教育戦略」、『年報 教育の境界』第7号、15-26頁
- 山ノ内裕子 2011「日系ブラジル人の移動とアイデンティティ形成—学校教育とのかかわりから」、三田千代子編『グローバル化の中で生きるとは—日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』、上智大学出版、181-193頁。
- 山ノ内裕子 2012「国境を越える在日ブラジル人の教育——ブラジル人保護者とブラジル人学校経営者の「戦術」に着目して」、森本豊富・根川幸男共編『トランスナショナルな『日系人』の教育・言語・文化—過去から未来に向けて』、明石書店、158-169頁。
- 山ノ内裕子 2013「トランスマイグラントとしての日系ブラジル人——ブラジルに戻った人びとの教育戦略に着目して」、志水宏吉他編『「往還する人々」の教育戦略—グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』、明石書店、206-218頁。
- 山ノ内裕子 2014「トランスナショナルな『居場所』における文化とアイデンティティ—日系ブラジル人の事例から」、『異文化間教育』第40号、34-52頁。
- 山ノ内裕子 2014「第3章 ブラジルでの難関大学合格を目指して—HIRO学園 エスコーラ・ブラジレイラ・プロフェッソール・カワセ」、志水宏吉他編著『日本の外国人学校—トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』、明石書店、265-280頁。
- 山本晃輔・山ノ内裕子 2014、「はじめに—経済危機を乗り越えて」、志水宏吉他編著『日本の外国人学校 トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』、明石書店、227-232頁。
- 山ノ内裕子 2015「在日ブラジル人家族の進路選択と教育戦略—日本で高等教育を終了した日系三世青年とその母親のライフストーリーから—」、『関西大学人権問題研究室紀要』第69号、1-24頁。
- 山ノ内裕子 2016「ブラジルへ帰国した日系人の若者たちの進路とエスニック・アイデンティティ—トランスマイグラントとしての経験から—」、『関西大学人権問題研究室紀要』第72号、23-46頁。

② 外国にルーツのある子どもたちの教育

日系ブラジル人の子どもたちに限らず、日本の学校に通う子どもたちの教育、文化、アイデンティティについて研究を行っている。また、非一条校である外国人学校に関しても、ブラジル人学校を中心として研究を進めてきた。さらに、2018年度からは、ムスリムなど、宗教的理由から学校生活に制限がある子どもたちを、食物アレルギーの子どもたちとあわせて「食マイノリティ」と包括的に定義し、子どもたちが学校給食や学校行事の中で、排除されることなく、インクルーシブな学校のあり方について、研究を進めている。

<関連文献>

- 山ノ内裕子 2003「外国籍児童生徒教育」における二つのアプローチ——国際理解教育的アプローチと人権教育的アプローチ」、『九州教育学会研究紀要』第30号、211-218頁
- 山ノ内裕子 2013「ニューカマー外国人児童生徒の教育について一国の施策を中心に」、上杉孝實、平沢安政、松波めぐみ編著『人権教育総合年表』明石書店、171-183頁。
- 山ノ内裕子 2017「移動する子どもたちの文化とアイデンティティ」、赤尾勝己『学習社会学の構想』、晃洋書房、136-155頁。
- 山ノ内裕子 2018「第1章 アイデンティティ」、『考えたい人権教育キーコンセプト』、公益財団法人世界人権問題研究センター。

③ 多文化共生のまちづくりに関する研究

在日外国人の生活は、日本社会の景気の変動に左右されやすい。2008年秋からのリーマンショックでは多くの外国人労働者の多くが職を失い、帰国を余儀なくされた。一方、景気の回復と、少子高齢化にともなう労働力の不足によって、出入国管理及び難民認定法が改正され、海外から、さらなる労働力を得ようとしている。日本はすでに多文化・多民族社会に転換しており、人類学的視点による多文化共生に関する研究が不可欠となっている。リーマンショック以降、今日まで、自治体からの委託調査など、積極的に研究を進めるほか、自治体の各種審議会などでも助言を行っている。

<関連文献>

- 多文化共生研究会（研究代表者 山ノ内裕子）2009「米原市外国籍市民インタビュー調査報告書」
- 多文化共生研究会（研究代表者 山ノ内裕子）2010「米原市外国籍市民実態把握補足調査報告書」「米原市多文化共生社会実現に向けた市民意識調査報告書」
- 山ノ内裕子 2012「ともに暮らせる社会——多文化共生と社会福祉」、岡田忠克編著『図表で読み解く社会福祉入門』、ミネルヴァ書房、180-190頁。

（関西大学・文学部・准教授）

3）男性性と軍事化（佐々木正徳）

韓国社会を主なフィールドとして、ジェンダー構造の分析を行っている。ジェンダー構造の分析を行うことで韓国社会に対する知見を深めること（韓国社会・文化論への貢献）と、韓国の事例をジェンダー研究の領域に付け加えることにより、ジェンダー研究の発展に寄与すること（ジェンダー研究への貢献）を目的としている。研究の際に用いる主要なキーワードが「男性性」「軍事化」である。

① 韓国社会と男性性～軍事化の視点から

韓国の男性性を語る際に非常によく指摘されることが義務兵役の存在である。「軍隊に行ったから（本当の）男性になった」という定型句は、実際に韓国社会で耳にすることができる。しかし、兵役制度を詳しく見てみると、時代の違いや配属先の違いによって実際の経験が多様であることにすぐに気付く。ゆえに「義務兵役」とは、男性を社会から分離させ、共通の経験をさせた後に、社会に再統合させていくことで「男性を誕生させる」というよりは、兵役に関連する何らかのことが人びとに「兵

役を経験した人物は成熟している」と認識させる制度なのである。研究では代替服務を経験した男性を中心に聞き取りを行い、兵役と関連する男性性が権力を握り続けている構造の理論化を試みている。

<関連文献（抜粋）>

- 佐々木正徳 2008『『男』であるということ—韓国のジェンダー、セクシュアリティ』『アジアから観る、考える：文化人類学入門』片山隆裕（編）、ナカニシヤ出版、pp. 49-61
- 佐々木正徳 2012「韓国におけるジェンダー」『アジアのなかのジェンダー』川島典子・西尾亜希子（編）、ミネルヴァ書房、pp. 177-196
- 佐々木正徳 2013「代替服務という生き方—韓国の男性性と兵役の多様性—」『長崎外大論叢』第17号、pp. 93-10
- 佐々木正徳 2014「軍事文化からみる韓国のジェンダー秩序—補充役のポジションに着目して—」『長崎外大論叢』第18号、pp. 137-147
- 佐々木正徳 2015「公益勤務要員からみた韓国の軍事主義」『日本ジェンダー研究』第18号、pp. 13-27頁。
- 佐々木正徳 2019「現代韓国社会の男性性 —軍事主義との関係から」『ジェンダー史学』第15号、印刷中

② 軍事化とダークツーリズム

戦争や災害の現場や関連施設を訪れ、（多くの場合）悼むのがダークツーリズムである。韓国は日本による植民地支配、解放後の混乱と朝鮮戦争、20年にわたる軍事独裁政権と、近現代の軍事遺構を数多く有している。また、現在も休戦状態にあるため、現在進行形の軍事施設を見学することが可能な世界でも貴重な地域である。これら施設は「北朝鮮の脅威に気付かせる（安保教育）」ことにも「平和の尊さを伝える（平和教育）」ことにも使われる。研究では実際に施設や遺構を訪問・見学し、韓国社会と軍事化との関係性を明らかにしようと試みている。

<関連文献（抜粋）>

- 佐々木正徳・大宅美里 2015「安保とツーリズム—韓国の軍事文化とダークツーリズム—」『長崎外大論叢』第19号、pp. 63-80

（長崎外国語大学・外国語学部・教授）

4）中国少数民族地域における双語教育（アナトラ・グリジャナティ）

改革開放後、新疆ウイグル自治区にも大量の漢族が移住し、経済的にも漢語の需要が高まり、ウイグル社会は大きな変容を迫られている。そうしたなか、双語教育（漢語と民族語）は、科目としての漢語教育から教授用言語の漢語化へと進んでいるが、さまざまな問題が起きている。その実態を、双語教育の歴史的展開をあとづけつつ、学校教育、家庭、社会生活などから明らかにし、多言語・多文化共生社会をめざす、民族教育のあり方を展望する。（グリジャナティ 2015 書誌情報）

筆者はこれまで中国新疆ウイグル自治区における双語教育の実態解明を通じ、現代中国の少数民族双語教育の特質を明らかにし、多民族国家中国における多言語共生社会（「言語和諧社会」）実現への道を探る研究に従事してきた。具体的には中国新疆ウイグル自治区における双語教育政策導入を、学校教育およびそれを取り巻く社会文化的文脈の両面から検討することにより、新疆社会の教

育と生活の両面における双語化の流れを明らかにした。これにもとづき政府もその国家目標に掲げる和諧社会実現に向けて、少数民族の意向と現実を踏まえつつ、現状の双語教育の実施過程の再調整や民族語の使用に対する制度保障の再確認をおこなうことの必要性を指摘した。(博士論文「中国新疆ウイグル自治区における少数民族双語教育に関する研究」要旨より坂元抜粋)

<関連文献>

- アナトラ・グリジャナティ 2006「新疆ウイグル自治区におけるバイリンガル教育について—地域格差を中心に—」九州教育学会編『九州教育学会研究紀要』第33巻、pp.173-180
- アナトラ・グリジャナティ 2006「新疆ウイグル自治区におけるバイリンガル現象の地域的変異」九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会編『国際教育文化研究』vol.6、pp.125-13
- アナトラ・グリジャナティ 2007「中国新疆ウイグル自治区における双語教育の現状と課題について—高等教育を中心に—」九州教育学会編『九州教育学会研究紀要』第34巻、pp.201-208
- アナトラ・グリジャナティ 2007「中国新疆ウイグル自治区における経済開発と言語変容—パズールを中心に—」九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会編『国際教育文化研究』vol.7、pp.97-108
- アナトラ・グリジャナティ 2008「幼児教育にみる中国新疆ウイグル自治区の双語教育」アジア教育学会編『アジア教育』第2号、pp.12-23
- アナトラ・グリジャナティ 2009「中国における少数民族双語教育に関する研究—多言語共生の視点から—」九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学コース編『飛梅論集』第9号、pp.17-32
- Ainaitula・Gulijianati 2008「Present State and Prospects of Bilingual Education in Xinjiang—An Ethnographic Perspective」『Chinese Education And Society』A JOURNAL OF TRANSLATIONS NOVEMBER—DECEMBER、pp. 37-49
- アナトラ・グリジャナティ 2009「中国の少数民族双語教育における母語の位置づけ—新疆ウイグル自治区の民族教育をめぐる—」九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会編『国際教育文化研究』vol.9、pp. 125-137 (以上、博士学位論文「中国新疆ウイグル自治区における少数民族双語教育に関する研究」参考論文)
- アナトラ・グリジャナティ 2015『中国の少数民族教育政策とその実態—新疆ウイグル自治区における双語教育』三元社

(中国新疆師範大学・言語研究院・副教授)

* アナトラ・グリジャナティ氏の研究概要に関しては坂元が記述している。中国新疆ウイグル自治区の政治状況が急激に緊迫化するなか、連絡も困難となり本人の最新の研究情報を入手することができなかった。一日も早い事態の鎮静化を祈るものである。

5) 先住民族の伝統知の接合に関する研究 (ジェフ ゲーマン)

主な研究対象を日本のアイヌ民族としながら、当初から、当事者たちに寄り添えながら、エミクな視点に立ち、先住民族が教育現場、政策や大学の教育研究体制に直面する様々な矛盾の実態解明や文脈に即した問題提示を行うことを目指してきた。実際にアイヌ民族の伝統的領土に位置する北海道大学に就職をしてから、北海道大学の教育研究や北海道でアイヌを対象とした諸事業の運営実

行に、よりアイヌの意向を反映させ、そのプレゼンスを増すために、一層発展した形の研究形態として、地域の知識人との共同研究・アクションリサーチ研究を模索してきた。15年間続いているこの過程において、研究手法は少しずつ民族誌的なアプローチから、集団的なインタビュー（フォーカス・グループ）形式へと移りつつある。

① 先住民族の伝統知の接合に関する研究

アイヌ民族の伝統知を政策や研究体制と対比した時の整合性と軌轢の実態を解明するための研究。北海道大学をはじめとする、先住民族の遺骨を保管する大学による、遺骨返還をめぐる諸相に関する研究。

<関連文献（抜粋）>

- Gayman, Jeffery (2011). Ainu Right to Education and Ainu Practice of “Education” : Current Situation and Imminent Issues in Light of Indigenous Education Rights and Theory. Intercultural Education. Routledge. V22(1), February, 2011, 15-28頁
- Gayman, Jeff (2015). Breaking through Impasses in the Ainu Rights Recovery Movement: A Case Study of one Transformational Activist-Disciple Relationship. In Kyonosuke Hirai (Ed.) Social Movements and the Production of Knowledge, Body, Practice and Society in East Asia (Senri Ethnological Studies 91), pp. 45-61. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Gayman, Jeff (2018). Ainu Puri: Content and Praxis of an Indigenous Philosophy of a Northern People. In John Petrovic and Roxanne Mitchell (eds) Indigenous Philosophies of Education Around the World , pp. 211-227. Routledge.
- Uemura, Hideaki and Jeffery Gayman (2018). Rethinking Japan’s Constitution from the Perspective of the Ainu and Ryūkyū Peoples. Special Issue of The Asia-Pacific Journal Japan Focus. 16(5), March 1 , 2018.
- Gayman, Jeff (2019). Challenges Surrounding Education and Transmission of Ainu Indigenous Ecological Knowledge in Japan: Disparate Valuations of a People and their IEK. In Thomas Thornton and Shonil A Bhagwat (eds). Handbook of Indigenous Environmental Knowledge: Global Themes and Practice. London: Routledge. (In press)
- Tsuyoshi Hirata, Ryūichi Ogawa, Yuji Shimizu, Tsugio Kuzuno and Jeff Gayman (2019) Paradoxes and Prospects of Repatriation to the Ainu: Historical Background, Contemporary Struggles, and Visions for the Future. In Cressida Fforde, Honor Keeler and Tim McKeown, Eds, The Routledge Companion to Indigenous Repatriation: Return, Reconcile, Renew. London: Routledge. In Press

② 文化的に適切な教育(culturally-relevant pedagogy)

当初はフィールド調査のために2年間居住した北海道平取町二風谷集落、二風谷小学校の教育を中心に、北海道大学に赴任してからは高等教育での、先住民族出自の学生が自らの民族的出自を誇れる環境の条件に関する考察や、その妨げとなっている要因の解明。

<関連文献>

ゲーマン・ジェフ「地域と文化に根ざした教育についての考察―二風谷小学校の取り組みを中心に―」『飛梅論集：九州大学大学院教育学コース院生論文集』 第9号 九州大学人間環境学府教育専攻教育システムコース 2009年3月 67-86頁。

③ 地域の知識人との共同研究・アクションリサーチ研究

<関連文献>

Gayman, Jeff. (2015) On Collaborative Ainu Research Initiatives: Needs and Challenges. In David Edginton, Norio Ota, Nobuo Sato and Jackie F. Steele (eds), "Japan and Canada in Comparative Perspective: Economics and Politics; Regions, Places and People", pp.152-169. Japanese Studies Association of Canada.

④ アイヌ語の継承の実態に関する研究

<関連文献>

Kayano, Shiro, Masashi Kawakami and Jeffry Gayman (2009). Nibutani Village, A Language-Revitalization Case Study of one Ainu Hamlet in Transition: Historicity, Positionality and Viability. Journal of Australian Indigenous Issues (Centre for Australian Indigenous Studies, Monash University). Vol 12 (1-4), 248-258.

⑤ アイヌの活動家や研究者が日本語で書かれた本や作文の英訳

Jeff Gayman (監修2018, December) The Spirit of Huci: Four Seasons of an Ainu Woman (計良智子著 アイヌの四季：フチの伝える心)。札幌：寿郎社
(北海道大学・教育学院/メディア・コミュニケーション研究院・教授)

6) 子ども・若者の社会関係構築と「自己決定」(針塚瑞樹)

2003年から現在まで、インドの首都デリーでストリートチルドレンといわれる子どもたちの教育を支援するNGOを拠点としてフィールドワークを行い、支援を受ける子ども・若者たち、支援をするNGO職員とボランティアによる社会関係の構築と子ども・若者の選択・決定の関連性を明らかにする研究を行ってきた。より具体的には、以下の①～③のテーマである。

① 不就学経験のある子どもの社会的包摂に関する研究

現在のインドでは、識字や学歴は就業するうえで重要であるが、ストリートチルドレンも含め義務教育年齢の不就学状態の子どもが全児童のおよそ1割存在する。NGO大国と称されるインドでは教育の分野においても多くのNGOが活動している。NGOがこうした子どもたちの教育に果たす役割に着目し、子どもがフォーマルな教育を受けるまで/受けるようになってからの実態と課題を子どもの視点から明らかにしてきた。

<関連文献(抜粋：以下同じ)>

針塚瑞樹 2007「子どもの路上生活経験と学校教育 ―インド、ニューデリーのストリートチルドレンを中心に―」『飛梅論集』第7号、pp.1-17。

針塚瑞樹 2010「路上生活経験のある子どもの「教育の機会」とNGO―ニューデリー、NGO‘SBT’の事例から―」『南アジア研究』第22号、pp.100-106。

針塚瑞樹 2016「インドにおけるノンフォーマル教育とNGO―デリー、ストリートチルドレンを対象とした教育実践と子どもの権利―」押川文子・南出和余編『「学校化」に向かう南アジア 教育と社会変容』、昭和堂、pp.197-220。

② 社会経済的弱者層の子どもの「自己決定」に関する研究

インドは1992年に「子どもの権利条約」を批准し、2000年代に入ると子どもを権利行使の主体とする理念に基づく法律制定や機関設置を相次いで行った。しかし現在も適切な保護のない環境に生きる子どもは少なくなく、子どもによる権利行使の実態の検討が必要とされている。ストリートチルドレンや児童養護施設に暮らす子ども、児童養護施設出身者を対象に調査を行い、子どもがNGOとの関係性を構築するなかで「自己決定」の主体として形成されるプロセスを明らかにした。

<関連文献(抜粋)>

針塚瑞樹 2007「子どもが路上生活を止める／続ける理由 ―インド、ニューデリー駅周辺の事例から ―」『子ども社会研究』第13号、pp.18-31。

針塚瑞樹 2009「子どもの「自己決定」に関する一考察―子どもの意見表明・参加の権利を中心に―」『九州教育学会研究紀要』第36号、pp.225-233。

針塚瑞樹、2011「子どもの「自己決定」と葛藤の可能性―インド都市社会における路上生活経験のある子どもの事例から―」『子ども社会研究』第17号、pp.37-46。

③ 児童養護施設出身の若者の社会関係構築に関する研究

若年層の就労と生活の不安定化は世界規模で指摘されており、特に児童養護施設を出た後の若者については、その多くが高等教育を受けておらず、また家族に頼ることも出来ないなか、経済的・社会的な困難を経験しやすい状況にあると指摘される。インドの児童養護施設に暮らした経験のある若者の移行過程における社会関係構築と家族・キャリア形成の実態について研究を行っている。

<関連文献(抜粋)>

針塚瑞樹 2013「インドにおける若者の進路選択にみる社会関係―タミルナドゥ州、工学系私立大学生の事例―」九州大学大学院教育学研究紀要 第15号(通巻第58集)、pp.73-89。

針塚瑞樹 2016「「家族」のあり方と子どもの幸福感―インド都市社会に生きる子どもたちの事例から―」『教育と医学』No.755、慶応大学出版会、pp.72-79。

針塚瑞樹 2017「ノンエリート高学歴者の職業アスピレーション―工学系私立大学卒業生の事例―」『アジア研究ワールドトレンド』アジア経済研究所、pp.8-11。

7) 中国都市部における産育文化の変容 (翁 文静)

筆者はこれまで、中国上海市において、フィールドワークを行い、①中国都市社会における産育習俗の持続と変容、②産育実践の外部化・資格化に関わる研究を行ってきた。

① 中国都市社会における産育習俗の持続と変容

伝統的な産育習俗はどの国でも、近代化とともに大きく変容し、そして現在でも変容し続けている。中国における産後一ヶ月の養生期間の習俗である「月子」も曾てないほど変容しつつある。一昔前の中国では、産婦と新生児が家の中で、実の母もしくは姑の世話を受け、様々な禁忌を守りながら、一ヶ月を過ごしていたが、最近では、親族の代わりに、月子の専門家「月嫂(yue sao)」が登場し、産婦と新生児に「科学的な」サービスを提供するようになりつつある。筆者は月嫂に着目し、「月子」をめぐる一連の産育習俗の持続と変容、そして、月嫂の果たす役割などを明らかにしてきた。

<関連文献>

翁文静 2012「中国都市部における産育習俗の持続と変容－上海市の事例から－」『発達社会学研究』第4号、放送大学大学院文化科学研究科、pp. 55-63。

翁文静 2013「中国都市部における伝統的育児道具・技法とその変容－股割れズボンとやり手水を中心に－」『国際教育文化研究』第13号、九州大学大学院人間環境学研究院、pp. 99-110。

翁文静 2015「現代中国都市部における産育方法の形成とその実践－家政婦月嫂(Yue sao)を中心に－」『飛梅論集』第15号、九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学コース、pp. 25-40。

翁文静 2015「中国都市部における月子をめぐる産育文化の再構築に関する一観察－月嫂の果たす役割を中心に－」『子ども社会研究』第21号、日本子ども社会学会、pp. 137-150

翁文静 2015「メディア・企業における「科学月子」の創造－中国都市部上海市を中心に－」『国際教育文化研究』第15号、九州大学大学院人間環境学研究院、pp. 175-187。

② 産育実践の外部化・資格化

中国では、昔から家族、特に女性に子どもや老親などの世話を任せる伝統がある。しかし、共働きの普及、少子高齢化の進展、人々の生活スタイルや意識の変化などにより、今日では家族による子育てや介護ができない現状にある。家族の代わりに、近年、資格化されつつある「家政サービス員」が注目を集めている。筆者は月嫂を含めた「家政サービス員」の種類、内容、養成実態、外部化・資格化の問題点などについて研究を行っている。

<関連文献>

翁文静 2009「現代中国都市部における出産事情－上海市の事例から－」『国際教育文化研究』第9号、九州大学大学院人間環境学研究院、pp. 163-174

翁文静 2011「中国上海市における育児の外部化について－家政婦雇用の背景を中心に－」『国際教育文化研究』第11号、九州大学大学院人間環境学研究院、pp. 33-43

翁文靜 2013「中国上海市における家事労働者の養成プロセスについて―月嫂（SAO）を中心に―」『発達社会学研究』第5号、放送大学大学院文化科学研究科、pp. 87-94。

翁文靜 2014「中国都市部における家政婦月嫂（SAO）の成立と発展―上海市を中心に―」『国際教育文化研究』第14号、九州大学大学院人間環境学研究院、pp. 103-114

翁文靜 2017「中国都市部における家族のケアの資格化―上海市の「家政サービス員」の養成を中心に―」『国際教育文化研究』第17号、九州大学大学院人間環境学研究院、pp. 1-13

（九州大学・アドミッションセンター・助教）

8) 子どもの育ち及び養育と住環境（劉 秀鳳）

2009年から2016年までの7年間、中国東南部福建省における世界遺産に登録された伝統的な民居―客家土楼の暮らしや子育て環境について研究を行った。客家人の子育ての文化伝承や活動について考察した上で、観光による客家土楼地域の変化や子どもの居住環境などについてフィールドワークを行った。伝統的な集合住宅としての客家土楼では父系血縁にもとづく親密な親族関係と住民の目が届きやすい中庭や回廊の構造によって子どもの育ちや養育の協働化を促す住環境が形成されていた。

<関連文献>

劉秀鳳 2013「多様な人に育まれる子どもの住空間、こども環境学研究 Vol. 9, No. 3 (C. N. 26)、pp44-45

劉秀鳳・南博文・坂元一光 2015「日常生活行動場面から見た客家土楼における子どもの住環境」、こども環境学研究 Vol. 11, No. 2, pp57-66

劉秀鳳 2016 坂元一光, 客家土楼における地域・居住環境の変容, 国際教育文化研究, Vol. 16, pp1-13

*劉秀鳳 2014「客家土楼の公共空間における子どもの遊びに関する考察―遊び空間と近隣の交流に着目して―」、日本子ども社会学会、(口頭発表)

（中国深圳大学・教育学部・講師）

9) 子どもの養育と子育て支援（森口晴美）

日本における公的機関の保健指導は、異常の早期発見等、スクリーニング要素が強く、子どもを主体とした子育て支援における、家庭の養育力を高める要素が含まれていない。フィンランドでは、継続した家族支援制度であるネウボラによるLT（“LET’S TALK ABOUT CHILDREN”）モデルを用いた効果がみられており、養育者が自らの子育てを肯定的に捉えるための対話モデル-LT-の日本での普及を目指したワーキンググループに参加している。

また、九大病院小児医療センターにおいて、長期入院をする子どもの付き添い家族のレスパイトを目的とした、看護学生による子どもの遊びのボランティアを運営、管理している。

（九州大学医学研究院・医学部保健学科・助教）

10) 障害のある人々の「生」と文化的実践（宮本 聡）

筆者は、2012年より、障害のある人々のコミュニティに参加し、文化的な実践を通じた当事者の

「生」（生き方）の構築過程の解明を研究主題とし、医療・福祉施設、作業所や在宅等の実践の場へのフィールドワークを実施している。以下は、これまでの研究の方向性をまとめたものである。

①障害のある人々と創作表現活動

日本における障害のある人々の創作表現活動に着目し、その現場にフィールドワークをし、調査研究を行なっている。近年、国内において、障害のある人の「アート」が、多方面から盛んに取り上げられている。一方で、マクロな芸術・医療的な言説では捉えられないダイナミズムが、その制作現場には現象している。そのような制作現場において、いかなる共同性のもと、生身の身体同士の関係性や「生き方」が紡がれていくのかを参与観察を基に明らかにしている

<関連文献>

宮本聡 2013 「知的障害を持った若者とその親によるコミュニティある音楽サークルを事例にして」『国際教育文化研究』、第 13 巻、p. p. 111-p. p. 122.

宮本聡 2015 「差異派/平等派を越えて-1980 年代の障害者芸術表現の実践を中心に-」『社会教育研究紀要』、第 1 号、p. p. 1-p. p. 9

宮本聡 2017 「障害がある人々の織りなす身体表現に関する一考察」『飛梅論集』、第 17 号、p. p. 17-p. p34.

②障害のある人々に関わる専門職の技能に関する研究

障害のある人々への教育・ケアの現場とそこで実践する専門職に着目し、制度的な環境に関する調査研究を行なっている。中でも、特罰支援教育や障害者介助の現場に参加し、その従事者の実践、特に資格に象徴される形式知と、それらの知に収まらない暗黙知や「わざ」的な知の次元に着目し、調査研究を行なっている。

<関連文献>

宮本聡、針塚瑞樹 2014 「特別支援学級における『子どもの特性』に配慮した教育実践 -『特別な教育的ニーズ』に関する事例研究-」『国際教育文化研究』、第 14 巻、p. p. 91-p. p. 102

宮本聡 2017 「介護者の熟練過程に関する一考察 -居宅介護の現場に着目して-」『国際教育文化研究』、第 17 号、p. p. 16~p. p. 28

(九州大学・人間環境学研究院・助教)

おわりに

以上、九大教育人類学研究室の 20 年目の節目をとらえ、出身 OB/OG 研究者たちのこれまでの研究活動を集約してみた。それは単に彼/彼女らの活動状況の紹介にとどまらない、教育人類学という日本でも数少ない応用人類学の研究状況を浮かび上がらせる作業でもあった。見ての通りこのアカデミ

ックなコミュニティに参画した彼/彼女たちのその後の研究活動は幅広くまた多彩である。しかしその問題の立て方や方法論において緩やかに共有された部分も見いだされ、それが九大の教育人類学研究の輪郭を形づくっていると言える。思うに OB/OG 研究者たちはともに広義の教育領域に関心を向けつつ、とりわけ社会的に周辺化されがちな、子どもや養育者、女性、障がい者、移民、エスニック・マイノリティ、先住民族あるいは時代に翻弄される伝統文化の継承者らが、その「生」をかけ紡ぎ出すさまざまな実践への、探求的だが共感的な眼差しを共有している。また方法論的にも、現場でその身体をもって考え、血の通った厚い記述として結実させようとするエスノグラフィーの手法も共有されている。研究者たちの独自で多様な研究活動はこれらの視点と方法を緩やかに共有することで九大教育人類学の伝統を引き継いでいると考える。そして彼/彼女たちはこうした知の伝統の上に立ちつつも、それぞれの独自の研究活動を通じそのさらなる更新に取り組んでいるのである。